

# 春風秋霜 11月号

平成30年11月1日  
島田市教育委員会より  
教育長 濱田和彦

春風をもって人に接し、秋霜をもって自らを慎む 佐藤一喬

## 1 自己肯定感を高めるには

ベネッセ教育総合研究所発行「VIEW21 Vol12」の中に、「子供たちの自己肯定感を高めるためには」というレポートがありました。この調査は、2015年から毎年小学1年生から高校3年生までの親子約2万人を対象にしたものです。

自己肯定感を「自分の良いところを言うことができる」として調査を行ったところ、「言うことができる」と回答した子供は約55%でした。45%の子供ができないということは、大きな課題だと思います。

同じ子供を継続して調査した結果、自己肯定感を持ち続ける子供は約3割、否定から肯定に変わる子供は約2割、否定が続く子供が約2割いることなどが分かったそうです。

また、将来の目標が明確な子供は自己肯定感が高く、将来について考え、夢や目標をもつことが、自己肯定感を高めることにつながり、さらに成績が上昇した子供や、自分のクラスが好きな子供も自己肯定感が高いことが分かったそうです。

自己肯定感が高い子供は、伸びが大きいと言われています。この調査からも、自分に自信があることや夢や目標をもつことが、その子の伸びにつながっているのだと思われます。しかし、自己肯定感は持続するものではないので、子供に対し適切なかわりを続けることが大切になります。

## 2 ライオンズクラブ善行賞受賞について

10月16日（火）にライオンズクラブ主催の善行児童・生徒表彰式が宮美殿で行われました。一時中断していた表彰ですが、41回と長い歴史のある表彰式です。小学校3校、中学校1校、高等学校3校が受賞し、島田市内の学校からは、島一小の4年1組と、島二中の杉山綾美さんと増田幸和さんが受賞しました。

島一小4年1組は、『スクールグリーンコンシューマーとしての活動』が評価されました。紙ごみの資源化を継続して行い、収益金で廊下に時計を取り付けるなど、教育環境の改善にも貢献しています。島二中の2人は、負傷して動けなくなった老人を助けたことが評価されました。

市教委では、人に役立つ行いを推奨してきたので、このように表彰される子供がいることを大変うれしく思います。「ありがとう作文」を読むと、多くの子供が人に役立つ行いをやらなくてはと思いつつも、なかなか行動に移せないことに気付きます。最初の勇気やきっかけが大切になります。勇気を持って始めの一步を踏み出す子供が増えることを願っています。



## 3 学校訪問を通して

10月16日に金谷中と五和小を訪問しました。金谷中2年生は、金谷中で創られた「大いなる河」を2年生の学年合唱にする伝統ができていました。歌詞の内容を深く理解し、作品作りをしている様子を見て、伝統を引き継ぐ大切さを感じました。

五和小学校では、学習問題と振り返りの意識が定着している様子や、教育機器の適切な使用、考え議論する道徳を参観し、全校で授業改善に取り組んでいる様子が見られました。

また、両校とも場を整えることや子供の作品を大切にしている様子も見られ、このような取組の成果が、学校の安定感につながっていると思いました。

#### 4 ジュニエコについて

10月21日（日）に初倉まつりが行われ、ジュニエコに参加した子供たちも出店していました。これまでと比べると、お店の装飾に工夫を凝らしたり、通行人に大きな声をかけたりと、販売姿勢が積極的でした。参加者の中に過去のジュニエコを経験した中学生もいたことが、他の参加者に良い影響を与えたのだらうと思います。



商品については、トッピングがたっぷりのクリームサンドやタピオカドリンクなど、工夫された商品が並んでいました。出店や販売までの過程は長く、当日までには大変なこともあったはずですが、夏の合宿を通して培った強い絆で乗り切ってきたのだと思います。売れ行きも順調そうだったので、11月18日（日）の表彰式において、市長に納税される金額が楽しみです。

## 肘かけ椅子

畑 活年 教育部長

### 「感覚をもっと大切にしたい」

猛威を振るった台風24号では、当市をはじめ多くの市町が停電に見舞われた。私の住む東町でも多くの家庭が、何十年ぶりかの大規模停電となり、ランタンや懐中電灯で夜を過ごすこととなった。実家のある隣町ではロウソクも取り出したと聞いた。

オール電化の我が家では、勿論、テレビは見れないが、風呂も沸かせない、炊事もできないなど、普段当たり前でできていたことができなくなり、電気がない不便さを改めて感じた。

しかし一方で、部屋の電気照明が点かない“暗さ”と、テレビからの電子音が消え、外吹く風の轟音、言わば自然界の音しか聞こえてこない、ある種“静けさ”の中に置かれたことで、ふと幼き頃の家族でロウソクを囲んで灯りが点くのを待った懐かしい感覚を思い出した。

今では、AIが、自動車を自動運転させたり、ドローンでの宅配サービスを行ったり、また、当市でもAIが、住民相談に答えるチャットボットが導入されるなど、人工知能を活用した事業が急速に多方面で拡大進化している。私でもタブレット（クックパット）の力で、作ったことのない料理を食卓に並べることができるようになった。

こうした論理性や合理性による効率化が加速度的に進行する情報化社会では、生活のクオリティが飛躍的に向上し、多くの利便性を享受できる機会が増えていくことは確かであろうが、一方で、デジタル化に乗り遅れないよう、スマホ等の新たな操作を齷齪（あくせく）し覚え、使いこなしていかなければならない息苦しさを感ずる人もいるのではないかと思う。

そんなある日、近くの天津谷川沿いの道をウォーキングに出かけた。台風一過から2日ほど経ち、頬を伝わる風は爽やかで心地よく、道沿いのススキの穂は風に揺れ、川はまだ濁ってはいたものの数羽の鴨が気持ちよく泳いでいた。また、近くの田園で、頭を垂れた稲穂を刈り取る長閑な作業風景等を見たとき、日々のデジタルな現実から解放されたような気分になった。これからも、科学技術は更に進化していくであろうが、その中で、五感で感じるアナログ的感覚、言わば“生な感覚”をしっかりと大切に持ち続けていきたいと思う。